

『ユリシーズ』のユグノー表象に見る移民像 —

ジョイスが種を蒔いた共同体の未来

岩下 いずみ

はじめに

『ユリシーズ』の移民表象を通して、アクチュアルな共同体のあり方にまで通底する、ジョイスが示唆した共同体像を読み解くのが本発表の目的である。「ユダヤ人を含むアイルランドにおける移民」というより広い観点から、これまで取り上げられてこなかった、『ユリシーズ』に見られるユグノー表象を検討する。ユグノーはフランスで迫害され17世紀にアイルランドに大挙して移民として入り、19世紀にユダヤ人がアイルランドに多く移民する事になるまで、移民の中での割合の最大数を占めた、アイルランドに入った移民である。ユダヤ人として差別され孤独な主人公レオポルド・ブルームをジョイスが描いた根底には、異質な存在こそが共同体の未来に必要な不可欠であり、はるか先を見通した共同体のビジョンがあったと思われる。その点からアイルランドにおいてユグノーも異質な存在だが、ユダヤとは受容が異なることを確認し、ユダヤ家系であるブルームのユグノー表象に対する反応から、彼の複雑な移民感情を読み解く。ジョイスが描く移民・共同体像に新たな見地から光を当てることで、移民を含んだ共同体のあり方と未来を考察する。

1. ジョイスが『ユリシーズ』に仕組んだ「誤り」の点と点を繋ぐ：ブルームの『ユグノー教徒』の記憶

『ユリシーズ』には重要なモチーフとしてユグノー表象が登場するが、最重要と思われるものは、マイアベーア作グランドオペラ『ユグノー教徒』である。ブルームは婚前からこのオペラの一節を口ずさんでいたことを、妻モリーが18挿話で思い出す場面が二箇所ある。『ユグノー教徒』は夫婦間で共有される思い出となっており、ブルームは『ユグノー教徒』の一節「大義は聖なり」を8挿話、13挿話で想起する。この『ユグノー教徒』についてのブルームの記憶にまつわる事実認識が1日を通して少しずつ変貌していく様が描かれるのだが、その事実認識の変貌の過程を追い、ジョイスが仕組んだと思われる点と点を繋ぎたい。「短期記憶」（分単位で消えるような、生きていく上で長く覚えておく必要のない記憶）と「長期記憶」（生きていくのに必要な、個人の記憶に残るもの）という視点から、夫婦の思い出に残り度々ブルームがその一節をリフレインしている『ユグノー教徒』に関する記憶は、長期記憶に属する重要なものである。しかし、1904年6月16日という1日を通して、この重要な記憶に誤りが生じていく。まず、8挿話では、ブルームは『ユグノー教徒』作曲はマイヤベーア（ユダヤ系）、『キリストの最後の七つの言葉』作曲はメルカダンテ（非ユダヤ系）と正しく認識している。しかし、11挿話では『キリストの最後の七つの言葉』をマイアベーア作と誤っている。そして、16挿話では『ユグノー教徒』がメルカダンテ作であるという誤りをステイーヴンに対して発言する。この誤りは「語り手」による操作的誤りと捉えることもできるが、ジョイスはこうしたいくつかの「点」をこの誤りの構築に仕組んでいると考えられる。ブルームの誤りとその過程を丹念に追うことで、彼の移民としての意識、共同体における自分の存在が見えてくる構成が、少しずつ浮かび上がってくるのではないだろうか。

2. ブルームの記憶に混乱が生じる原因を探る：ブルームの移民意識と共同体

ブルームは12挿話でメルカダンテがユダヤ人だと“the Citizen”（市民）と呼ばれる偏狭なナショナリストの男に言う。「市民」はユダヤ家系であるブルームを執拗に侮辱し、ブルームは“Mendelssohn was a jew and Karl Marx and Mercadante and Spinoza. And the Saviour was a jew and his father was a jew. Your God.”（U 12. 1804-06）と反論するのだが、実際にはメルカダンテはユダヤ人ではない。争いを好まないブルームが「市民」に反論したことは、彼の精神に大きなショックを与え、それにより記憶に影響が出たことは考えうる。『ユグノー教徒』はブルームとモリーの幸福な記憶にも繋がる重要なモチーフでもある。この誤りの過程の原因に対する単純明快な回答は困難だが、ブルームのユダヤ系移民という出自が大きな影響を与えていることは確実だろう。また同じ移民としてのユグノーに対する複雑な心情も絡み合っているようである。この移民意識に関連し「共同体」を合わせて考察したい。『ユグノー教徒』は、ブルームの家系に属する者によっても暗示的に言及されるモチーフである。15挿話の夢幻劇のような場面では、ブルームの祖父リポティ・ヴィラーグが登場し、ユグノーやオペラ『ユグノー教徒』の一節に触れつつ、記憶や継承について語る。この夢幻劇がブルームの意識下のものと仮定すると、家系の継承という強迫観念が働いていることがうかがわれる。さらに、ユダヤとしての

移民感情、ユグノーなどのユダヤ以外の移民に対する複雑な感情も反映されているようである。ユグノーは、17世紀の入植後に内戦や絹織物産業においてアイルランドに貢献したため優遇されてきた。一方、ユダヤは19世紀土地法で農地を終われた農民に対し高利貸しをしたため反ユダヤ感情がアイルランドで高まり、迫害も起こった。これらそれぞれの移民に対する扱いの違いから、ブルームのユグノーに対する複雑な感情が形成されている。『ユリシーズ』で描かれる「共同体」は、彼のような異分子も存在する多様なもので、疎外された人々も内包する。ここには新たな共同体像が提示されており、開かれた結末には未来の共同体像へのジョイスの展望が示され、読者がそれらをどのように受け入れ、その中で生きるのかという問いかけをしている。

3. ブルームのユートピア像を考える：共通するものを持たない共同体という未来像

ここで、モーリス・ブランショによって20世紀後半に再定義された「共同体」の意味を考えたい。ジョルジュ・バタイユの共同体理論に触れつつ「共同体は、それを締め出す存在の外部を内に含んでいる」(31)とブランショは指摘し、ジャン・リュック・ナンシーが提唱した「無為の共同体」についても論じる。「無為の共同体」とは、「共同体が相互の分割そのものによって関係づけられること、無為の中で接し合う存在者たちのコミュニケーションによってのみ存在しうる共同体」(181)である。これら「共同体」再定義の一つの理解として、共同体の成員は、従来考えられるような共同性、合一性によるもので結びつかない者で、アイルランドのユグノー移民、ユダヤ移民などの異分子も含んでいることが導き出されるのではないだろうか。この再定義された共同体像を具現化したものが、ブルームが考える次のユートピア像である。

All kinds of Utopian plans were flashing through his (B's) busy brain, education (the genuine article), literature, journalism, prize titbits, up to date billing, concert tours in English watering resorts packed with hydros and seaside theatres, ..." (U 16. 1652-55)

教育、文学、ジャーナリズム、などバラバラなものが混在したビジネスプランがブルームのユートピア像で、自らのビジネスカとスティーヴンの声を組み合わせるといふ計画には、互いに共通性はないからこそ補い合っ共同性を形成するというブルームの理想がある。芸術面は歌の才能があるモリーとスティーヴンが、ビジネス面はブルームが担当し、新たな家族、ビジネスパートナーとして強く生きるというブルームの意識下には、移民として迫害されてきた家系をこうしたユートピアにおいて継承していきたいという思いも反映されているのではないだろうか。ブルームはモリーとスティーヴンだけでなく、自分の15歳の娘ミリーとスティーヴンも結びつけようとする。ミリーは親元を離れ写真館で働いているが、ブルームの祖父や父が写真に関わる職業をしていたことから、ミリーは家系を継承している。父がヨーロッパ各地を転々とした話を聞き、6歳のブルームがその地に支店を作るビジネス構想を思い描く17挿話の描写が、ブルームがビジネス面を重視する根底にあり、彼は幼い頃から家系の継承を意識していた。ブルームのこの傾向には、家系を継承し移民という異分子のまま新たな共同体に参加する自分の姿が投影されている。

おわりに

ジョイスの描く共同体は異分子を「内包」することが移民を通して描かれる。現代の共同体、そしてジョイスの時代の共同体もまた、同一性で結ばれるのではなく、相互補完的、すなわち、同一のものがいない関係において結ばれている。だからこそ共同体は多種多様な存在を許しあい、柔軟なものとなり得て、人々がお互いを補いながら生きていくことが可能になる。これらの移民表象、そしてそれにまつわるブルームのエピソードは、いわばジョイスが蒔いた種のようなもので、作品執筆当時ジョイスが意図しえなかったかもしれないユグノー表象に潜んだ種が、『ユリシーズ』出版100年後、移民・難民問題が大きく取り上げられている現在、芽を出している状況であるのかもしれない。ジョイスは、いくつかの仕掛け、そしてブルームという異分子的存在によって、共同体像を私たちに暗示している。モチーフが何度も作品内で登場することによって、点と点を繋ぐ線を形成し、そこから豊かに広がる『ユリシーズ』読解が可能になる。読者がこれらの仕掛けを発見し、再読を促すことで『ユリシーズ』がさらに読み継がれるとジョイスは考えていたのではないだろうか。

引用文献

Joyce, James. *Ulysses*. 1922. Edited by Hans Walter Gabler et al., Vintage Books, 1986. 引用は略号Uの後に章番号と行数を示す。

ブランショ、モーリス『明かしえぬ共同体』西谷修訳、ちくま学芸文庫、2018年。